



大杉東小だより

令和8年9月1日 NO. 5

江戸川区立大杉東小学校 校長 望月 潔

自ら考え、行動する「安全」の力を育む

長い夏休みが終わり、校舎に子供たちの元気な声と明るい笑顔が戻ってきました。ちょっぴり日焼けした顔や、ひと回り遅くなった後ろ姿から、それぞれが充実した夏を過ごしたことが伝わり、大きな喜びを感じております。

二十四節気では暑さが峠を越える「処暑」を過ぎ、間もなく「白露（はくろ）」を迎えます。大気が冷え、草花に白い露が結び始めるこの時期は、本来であれば実りの秋へと向かう穏やかな季節です。そしてこの時期は台風襲来の特異日とも重なり、自然の猛威に対する備えが欠かせない時期でもあります。

この夏、私たちは改めて自然災害の恐ろしさを突きつけられました。熊本で発生した地震や、千葉を襲った記録的な豪雨により、多くの方々が困難な状況に置かれています。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

こうしたニュースを耳にするたび、私たちが今、毎日学校に集い、学び合える「当たり前の日常」がいかに尊く、壊れやすいものであるかを痛感せずにははいられません。災害は、いつ・どこで・誰の身に降りかかるか分かりません。2学期のスタートにあたり、改めて「安全」について皆さんと共に考えていきたいと思います。

近年の防災教育では、大人の指示を待つ受動的な姿勢から、子供たちが主体的に関わる「自分事化」が重視されています。例えば自分たちの通学路にある「危険な場所」や「避難できる場所」を自分たちの目で探し、タブレットなどデジタルの力を借りて独自のハザードマップとして発信する…そんな活動をしている自治体もあります。こうした「発信者」としての視点を持つことは、地域の一員としての自覚を育て、防災を真に「自分事」として捉えることへ繋がります。デジタル技術を活用し、正確な防災情報を自ら取得し、建設的に発信する能力（デジタルシティズンシップ）を育てることも、これからの時代に必要な安全教育の形です。間違っても、デマ情報やフェイクニュースをSNSで拡散するような（或いはそれに惑わされるような）誤った発信力を育ててはいけません。

また、日常の習慣も大事です。下駄箱の靴を揃える、席を立つ時に椅子を入れるといった、わずか「1秒」の小さな習慣。この「後を見る」心のゆとりが、自分や身の周りの人々の安全な避難行動に繋がり、ひいては登下校中の通学路の危険箇所気づき、あるいは地震の際に周囲の安全を瞬時に確かめる力へと繋がります。足元の小さな安全を疎かにしない姿勢こそが、いざという時に自分や仲間の命を守る「主体的な安全意識」の根幹となるのです。

もちろん、安全な教育環境の構築は、学校の努力だけで完結するものではありません。ご家庭でもぜひ、今夏のニュースを話題に「我が家の避難ルール」や「連絡手段」について話し合ってみてください。2学期は一年で最も長く、様々な行事を通じて子供たちが大きく成長する時期です。子供たちが安心して挑戦し、その瞳を輝かせることができるよう、保護者・地域の皆様と手を取り合い、安心・安全な学校づくりに邁進してまいります。

今学期も、どうぞよろしくお願い申し上げます。